

生涯学習社会におけるメディア・リテラシーに関する総合的研究(1) ー成人学習者と社会教育・生涯学習担当者のメディア利用ー

岩崎久美子

(国立教育政策研究所)

井上豊久

(福岡教育大学)

立田慶裕

(国立教育政策研究所)

【要旨】

成人学習者及び生涯学習・社会教育行政担当者のメディア利用の実態と課題を明らかにする。利用頻度では年齢差が顕著で若年ほど新しいメディアに抵抗が少ない。コンピュータは「ボランティアや市民活動への興味」と「人づきあい」が多い層の利用度が高い。本やテレビへの批判的意識は意欲や生活の主体性と関係する。インターネットに批判的な者はパソコンに精通している。家族の話合いはテレビや新聞のリテラシーを高める。子どもの有害情報は利用者の判断に任せる意見が多く、インターネットは大人が配慮すべきという意見が多い。行政担当者は自宅や職場で新しいパソコン利用を難しく感じている。今後、メディア毎の教育機能の相違を配慮した学習者や指導者のリテラシー研究が重要となる。

1. 研究の目的と方法

生涯学習社会は学校教育で培われる読み書き計算などの基礎的な学習能力に加え、社会の変化に伴って生じる生活や文化的課題を遂行する学習能力を求める。特に、現代社会の多様なメディアの普及は、情報活用能力と共に情報を取捨選択する新しい学習能力、「メディア・リテラシー」を必要とする。本研究の目的は、メディア・リテラシー概念の理論的研究を端緒に、成人学習者及び生涯学習・社会教育行政担当者の調査に基づき、メディア利用の実態と課題を明らかにすることにある。調査対象および方法は下記による。

- ① 全国の生涯学習・社会教育センター講座及び開放講座受講者 629 名 (女性 45.8%、男性 52.6%) に対する質問紙調査
- ② 1078 市区町村の生涯学習、社会教育担当者に対する質問紙調査
回答数 806 名 (女性 14.4%、男性 81.0%)、回収率 74.8%

2. メディアの利用と活動姿勢

(1) メディアの所有と利用実態

多岐にわたるメディアのうち、近年普及した携帯電話・PHS、パソコン、インターネットに接続しているパソコンの所有率は、図 2-1 に示した。パソコンは、全体の 7 割の人が所有、性別では、男性は個人所有率が高く、女性は家族共有率が高い傾向にある。携帯電話・PHS の所有では、性差が小さく個人所有率は男女ともに約 5 割となっている。

利用頻度は、パソコンを「ほぼ毎日使う」と回答した者は、女性 29.5%、男性 44.5% であり、男性の利用頻度が高い。年代では「毎日使う」割合は、30 代で最も高く(62.5%)、次いで 20 代(49.1%)と 40 代(47.0%)の順である (表 2-1 参照)。

図2-1 携帯電話・パソコンの所有

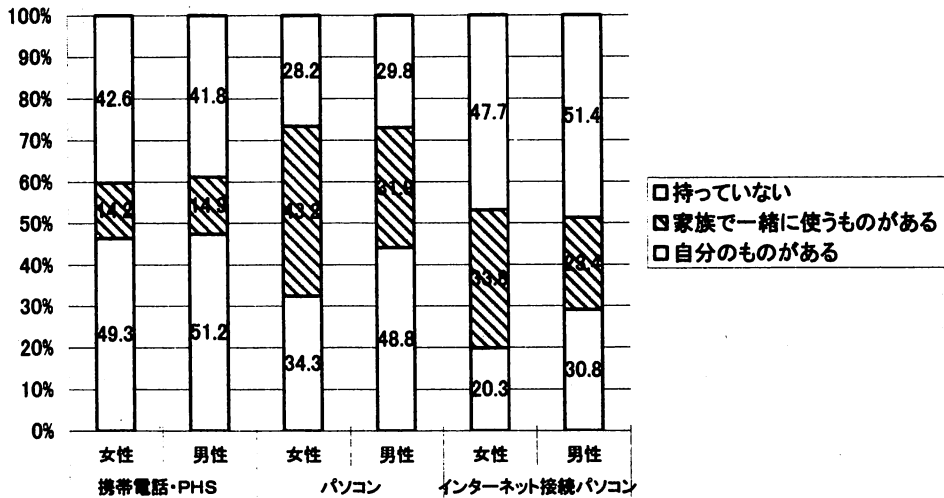


表 2-1 パソコンの利用頻度 (%)

		1. ほぼ毎日使う	2. ときどき使う	3. 使わない
全 体 n=615		37.4	30.9	31.7
性別	女 性	29.5	37.4	33.1
	男 性	44.5	25.8	29.8
年代別 ***	20 代	49.1	36.4	14.5
	30 代	62.5	28.1	9.4
	40 代	47.0	34.1	18.9
	50 代	27.4	43.2	29.5
	60 代	26.3	26.9	46.9
	70 以上	13.3	16.7	70.0

表 2-2 携帯電話・PHS の利用頻度 (%)

		1. ほぼ毎日使う	2. ときどき使う	3. 使わない
全 体 n=613		36.2	20.9	42.9
性別***	女 性	34.3	22.1	43.6
	男 性	37.8	20.0	42.2
年代別 ***	20 代	85.5	5.5	9.1
	30 代	51.5	23.7	24.7
	40 代	45.0	22.9	32.1
	50 代	28.0	21.5	50.5
	60 代	18.3	25.1	56.6
	70 以上	11.7	11.7	76.7

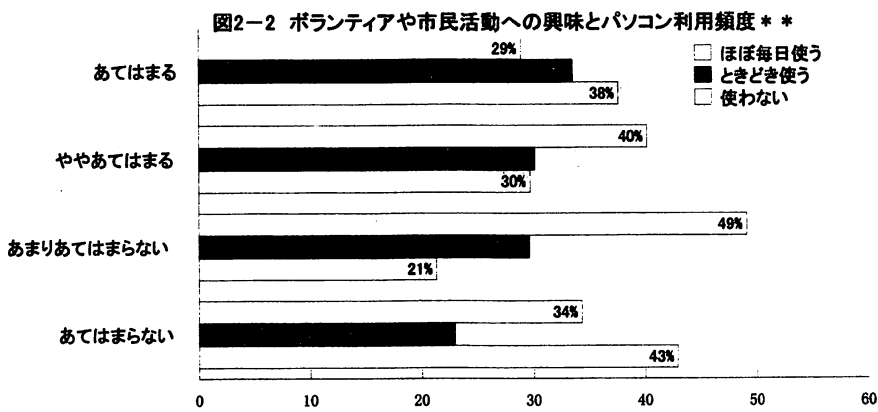
(有意差危険率 ***0.01 以下 **0.1 以下 *0.5 以下)

携帯電話・PHS の利用頻度では性差が小さく、年齢層の差が大きい。「ほぼ毎日使う」が全体で 36.2%であるが、性別で見ると女性 34.3%、男性 37.8%、年齢層では 20 代が 85.5%と高く、次いで 30 代 51.5%の順である (表 2-2 参照)。20 代、30 代は、コミュニケーション手段・自己表現手段として、インターネット、携帯電話・PHS などの新しい

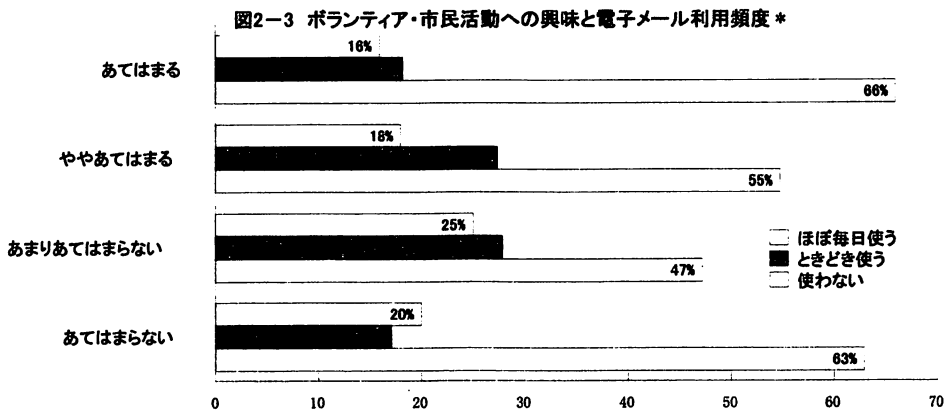
機器利用に対して抵抗感が少ない。利用頻度が最も高い年齢層はパソコンが 30 代、携帯電話・PHSは 20 代である。この年齢層の差は、新しい物に心理的抵抗感が低い若い世代から新しいメディアが普及していく傾向と、そのメディアが登場した時期の時間差を反映していると思われる。

(2) 活動姿勢とメディアの利用

次に、携帯電話・PHS、パソコン、電子メールの利用頻度と、有意差が顕著に認められた活動姿勢項目「ボランティアや市民活動への興味」と「人づきあい」の2項目との関係を見よう。(有意差危険率 ***0.01以下 **0.1以下 *0.5以下)「ボランティアや市民活動への興味」に「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した者が、パソコンや電子メールを利用する頻度は必ずしも高くない(図2-2、2-3参照)。メディアを介した間接的なコミュニケーションより、直接的交流を優先する姿勢が推察される。「人と話すことはあまりない」という項目に「あてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答した者(人と積極的に話す者)は、パソコンを利用する頻度が高い。人と積極的に関わる気質の者が新しいメディア機器などの利用により強い関心を持つ傾向がある。

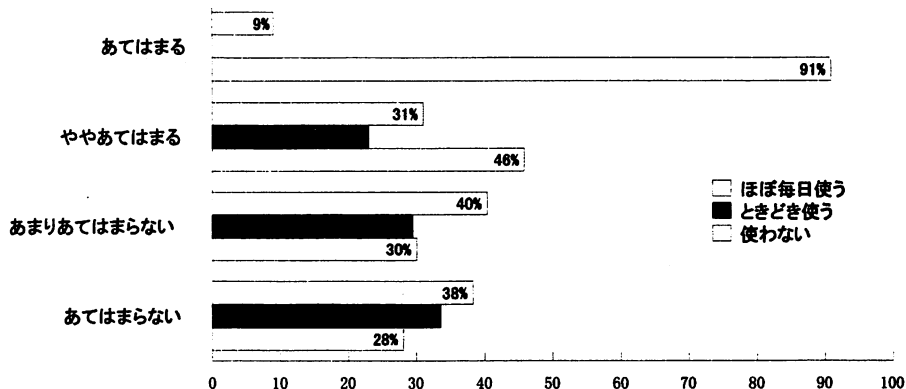


(「ボランティアや市民活動への興味がある」×「パソコン利用頻度」(n = 607))



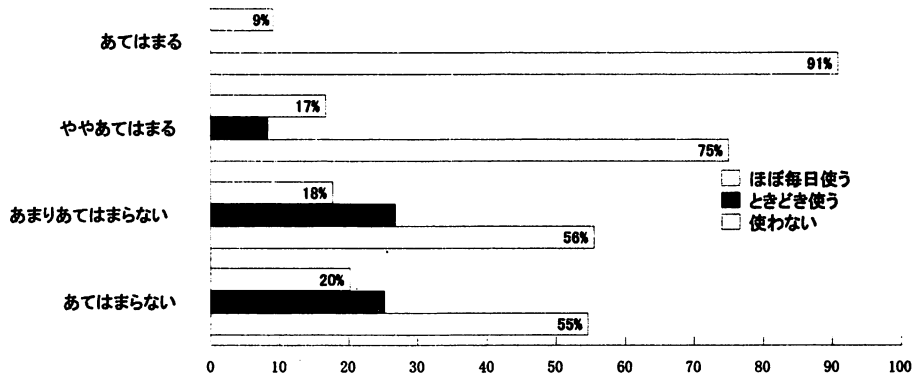
(「ボランティアや市民活動への興味がある」×「電子メール利用頻度」(n = 602))

図2-4 人づきあいとパソコン利用頻度 * * *



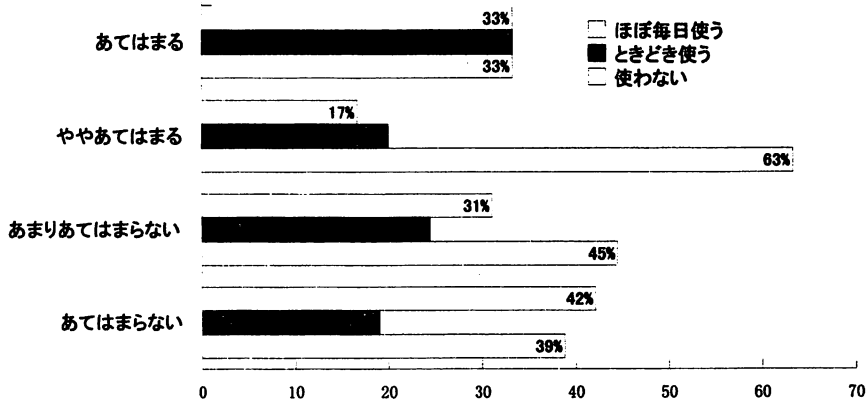
(「人と話すことはあまりない」×「パソコン利用頻度」(n=601))

図2-5 人づきあいの少なさと電子メール利用頻度 *



(「人と話すことはあまりない」×「電子メール利用頻度」(n=596))

図2-6 人づきあいの少なさと携帯電話・PHSの利用頻度 * *



(「人と話すことはあまりない」×「携帯電話・PHS利用頻度」(n=599))

また、人と積極的に関わる気質の者が電子メールや携帯電話・PHSをとりわけ多く利用する傾向は認められず、人と話すことが多いと回答した者のコミュニケーション手段が必ずしも電子媒体を多く利用するものではないことがわかる。(岩崎久美子)

3. メディアに対する批判的意識における特質

ここでは、各種メディアへの考えの特徴、特に批判的意識と種々の態度との関わりをみる。具体的には、各種メディア（本、テレビ、インターネット）の体験において、「本当のことと違う」とどの程度感じたかとの質問事項とのクロス結果をみることとする。（有為差危険率 ***0.001 以下 +0.1 以下）

（1）主体的態度

図 3-1 「こういうことがしたいなあ」と考えるとわくわくする割合（メディア別批判意識別）

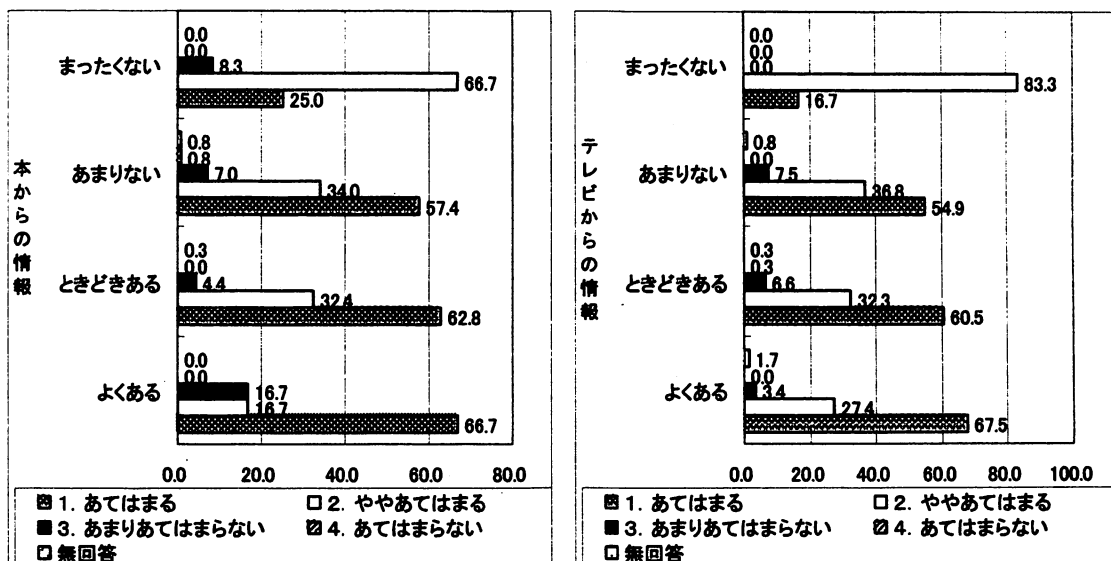


図 3-1 のように、本やテレビへの批判的意識がある場合「こういうことがしたいなあ」と考えるとわくわくする」の割合が高く、意欲的で、生活に主体的である。

（2）人間関係とパソコン技術

図 3-2 批判意識別人前に出るのが苦手な割合とパソコン等への接触意識の割合

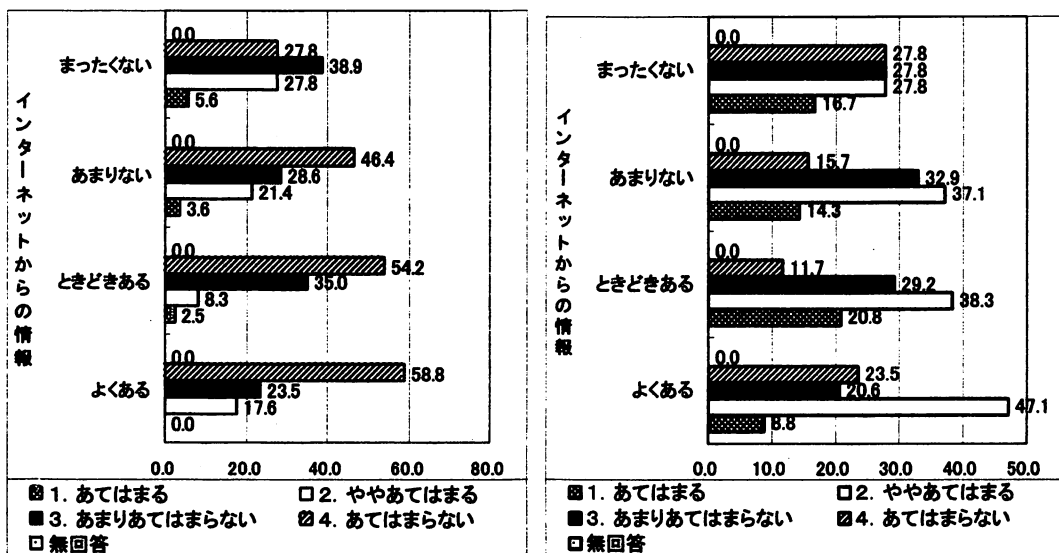


図 3-2 のように、インターネットに批判的な場合はパソコンに精通しているが、人前に出るのは苦手と得手に二極化している。

(3) ボランティアや市民活動への興味

図 3-3 テレビ情報への批判意識別ボランティアや市民活動への興味がある割合

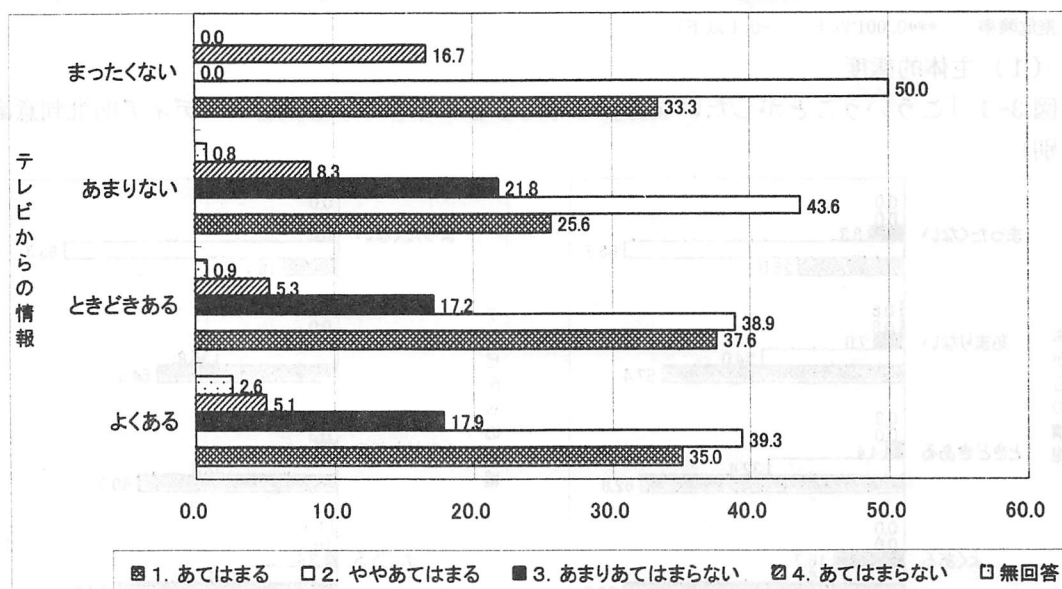


図 3-3 のように、テレビに批判的な場合もボランティアや市民活動へ若干興味がある割合が高い。

(4) 一人での学習

図 3-4 メディア別批判意識別一人での（本や参考書籍だけで）学習している割合

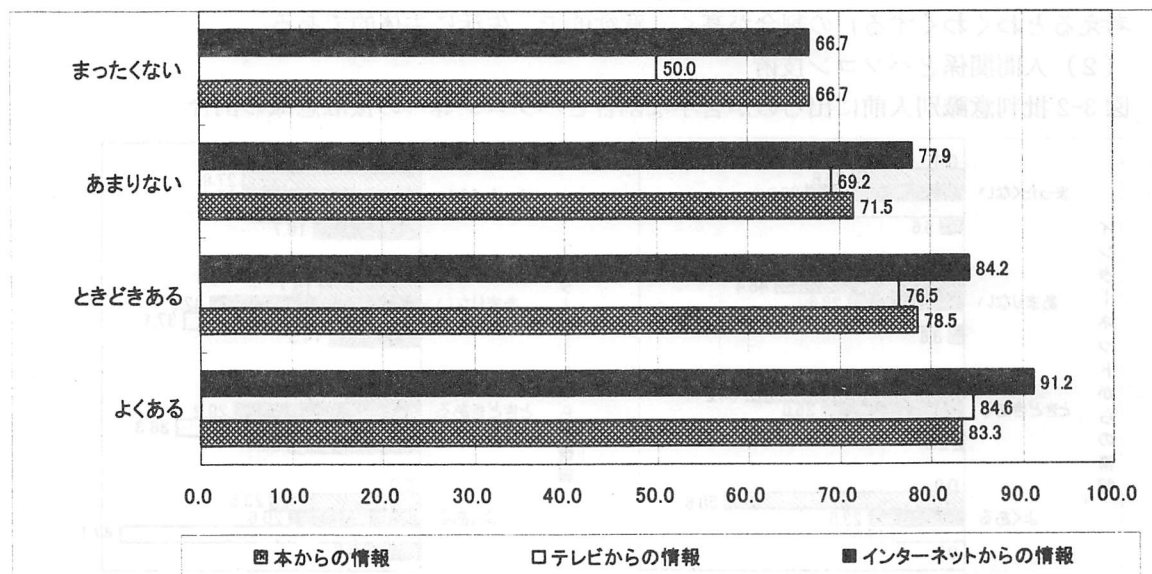
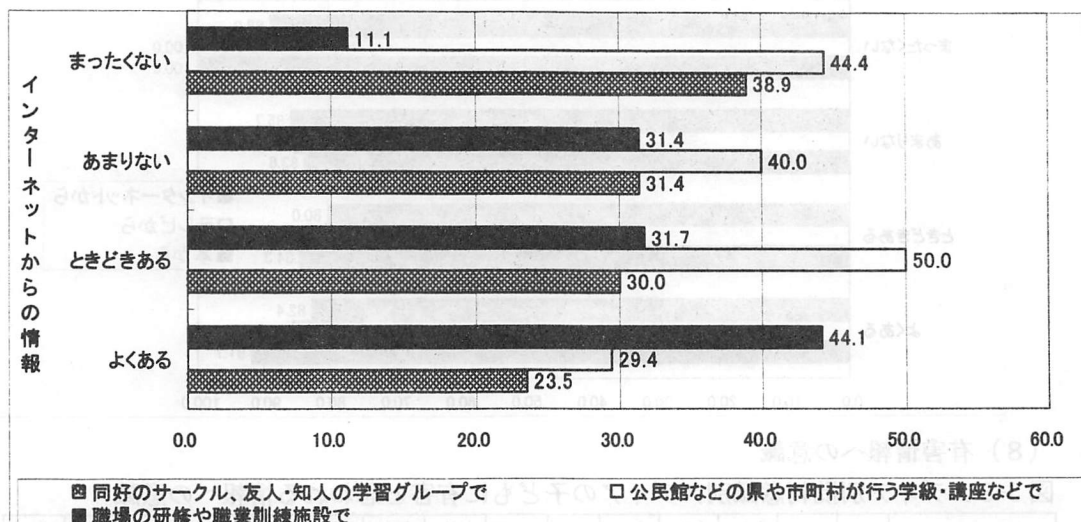


図 3-4 にみるように、メディア全般に批判的な場合、本などで個人学習する割合が高い。インターネットに批判的な場合、職場学習の割合が高いが、インターネットに批判的でない場合、サークルや公民館等の講座参加している割合が高い。

(5) インターネットでの批判意識と学習方法

図 3-5 インターネットでの批判意識別学習方法別学習経験率



インターネットに批判的な場合は職場学習の割合が高く、批判的でない場合はグループ、サークルや公民館などによる学習割合が高い。(図 3-5)

(6) メディアに関する会話

図 3-6 家族とテレビ番組, 本, 新聞, 雑誌の記事を話し合う割合 (メディア別批判意識別)

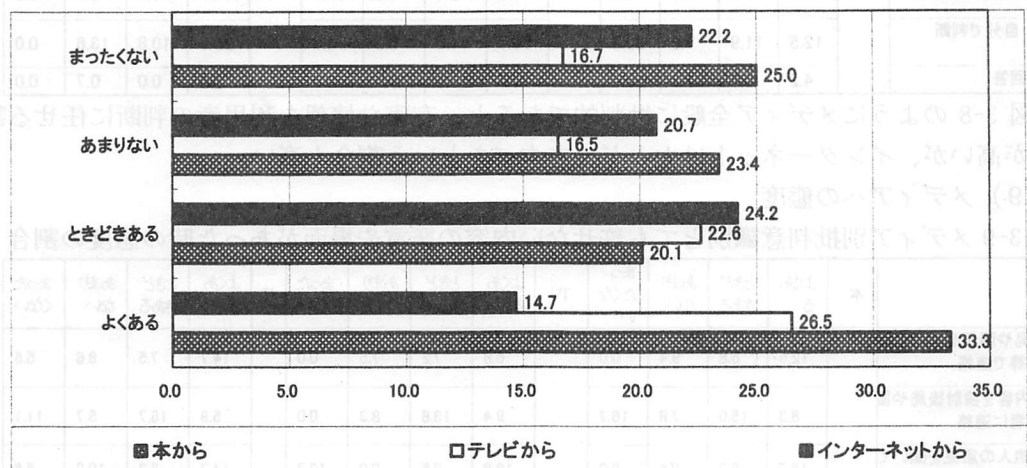
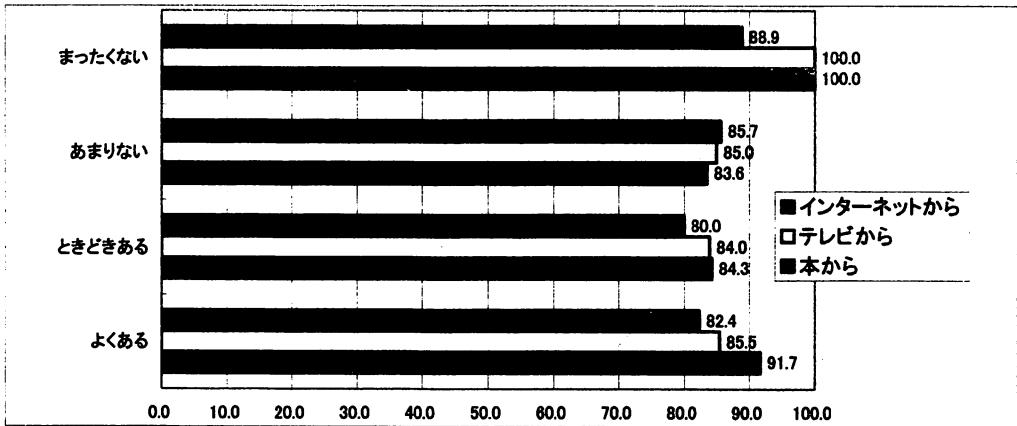


図 3-6 のように、本やテレビの批判意識が高いとメディアについて家族の話し合いがある。しかし、IT の批判意識の違いでは話し合いの割合は高くない。

(7) メディア理解

図 3-7 のように、本やテレビでの批判意識が高い場合「メディアが伝えた内容を視聴者はみんな同じように解釈する」ことが「ない」という高い理解度がみられる。インターネットからの情報で本当の事と違うといった批判意識は若干低い。

図 3-7 メディア別批判意識別メディアが伝えた内容を同じに視聴者が解釈することが「ない」と考える割合



(8) 有害情報への意識

図 3-8 メディア別批判意識別メディアの子どもに有害と思われる情報への意識

	本	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	TV	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	IT	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
1. 法律で規制	***	54.2	33.4	33.2	33.3	***	35.0	34.2	35.3	16.7	***	35.3	31.7	36.4	55.6
2. 制作側が注意		29.2	47.1	48.0	25.0		42.7	46.1	49.6	33.3		29.4	45.8	42.1	44.5
3. 大人が工夫する		0.0	6.8	9.8	8.3		6.8	8.5	7.5	16.7		14.7	11.7	7.1	0.0
4. 自分で判断		12.5	11.9	7.8	33.3		13.7	11.0	6.8	33.3		20.6	10.8	13.6	0.0
無回答		4.2	0.3	1.2	0.0		1.7	0.3	0.8	0.0		0.0	0.0	0.7	0.0

図 3-8 のようにメディア全般に批判的であると、有害な情報を利用者の判断に任せる割合が高いが、インターネットは大人が工夫すべきという割合も高い。

(9) メディアへの態度

図 3-9 メディア別批判意識別とても許せない内容の発言や場面があった時の態度の割合

	本	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	TV	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	IT	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
1 局や関係者にすぐ電話等で連絡	***	12.5	6.8	9.4	0.0	***	6.8	7.2	7.5	0.0	+	14.7	7.5	8.6	5.6
2 内容を検討後局や関係者に連絡		8.3	15.0	7.8	16.7		9.4	13.8	8.3	0.0		5.9	16.7	5.7	11.1
3 他人の意見を聞いて決める		16.7	9.8	8.6	0.0		12.8	8.5	9.0	16.7		14.7	8.3	10.0	5.6
4 作品を送ったり、応募したりする		0.0	0.3	0.0	0.0		0.0	0.3	0.0	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0
5 身の回りの人に意見を言うだけ		33.3	53.2	56.6	75.0		51.3	54.5	57.9	66.7		47.1	53.3	60.7	50.0
6 何もしない		16.7	10.6	11.3	8.3		13.7	11.3	11.3	16.7		14.7	11.7	12.9	11.1
7 テレビは見ない		0.0	2.7	2.7	0.0		4.3	1.9	2.3	0.0		2.9	0.8	1.4	11.1
無回答		12.5	1.7	3.5	0.0		1.7	2.5	3.8	0.0		0.0	1.7	0.7	5.6

メディアに批判的な場合、許せない内容の発言や場面があった時テレビ局に連絡する割合が高く、家族など身の回りの人に意見を言う割合は低い。(井上豊久)

4. 生涯学習・社会教育担当者のメディア活用と多様なメディア・リテラシー

生涯学習・社会教育担当者のメディア利用に関しては、平成12年の生涯学習審議会答申でその重要性が論じられている。特に、「生涯学習行政に携わる職員、特に生涯学習関連施設の職員」については、「情報機器を使用して情報を収集し、自ら発信する能力や、学習者から情報検索の方法や情報の活用方法について相談を受けた場合の対応能力、情報セキュリティなど情報ネットワークで問題が生じた場合の対処方法・指導方法などのより幅広い情報リテラシーを身につけること」が必要であり、そのためにも「大学、短期大学、高等専門学校や専修学校など専門的な知識を持った人材・施設を活用して、生涯学習行政に携わる職員などの情報リテラシーに関する研修体制を整備・構築すること」が求められている。本節では、実際に全国の市区町村の生涯学習・社会教育担当者がどのようなメディアの活用を行い、メディアをどの程度難しく感じているか、そのリテラシーの実態に焦点を当てて考察する。

(1) メディアの所有と使用の実態

表 4-1 メディアの所有率

	自分だけのもの がある	職場で（家族で）一緒に 使うものがある	持っていない
携帯（PHS）	82.6	9.1	15.2
（学習者）	50.2	14.7	42.0
ファックス	33.4	77.7	10.1
（学習者）	9.7	49.1	44.1
パソコン	75.0	66.9	5.6
（学習者）	41.7	37.3	29.3
パソコン+インターネット	55.9	52.9	18.3
（学習者）	25.7	28.3	49.7
メールアドレス	58.8	42.7	22.6
（学習者）	35.5	16.0	52.3
ビデオカメラ	46.5	37.0	31.4
（学習者）	11.1	32.3	57.7

表 4-2 メディアの使用頻度

	ほぼ毎日使う	ときどき使う	使わない	合計
携帯（PHS）	65.6	19.3	15.1	100.0
（学習者）	36.2	20.9	42.9	
ファックス	26.2	68.1	5.6	100.0
（学習者）	7.2	56.0	36.9	
パソコン	79.3	15.3	5.4	100.0
（学習者）	37.4	30.9	31.7	
パソコン+インターネット	44.9	34.5	20.7	100.0
（学習者）	25.4	23.6	51.1	
パソコン電子メール	27.5	41.1	31.4	100.0
（学習者）	18.9	23.3	57.9	
携帯でメール	23.6	25.4	50.9	100.0
（学習者）	11.6	13.0	75.4	
ビデオカメラ	0.5	56.5	43.0	100.0
（学習者）	0.7	34.2	65.1	

まず、メディアを使用する前提となる所有状況をみると、携帯やファックス、パソコン、ビデオなどでの新しいメディアは、学習者に比べ職場や個人で所有している比率が高い。また、単に、新しいメディアの所有率が高いだけでなく、その使用頻度も学習者より高い。（ビデオを除く）

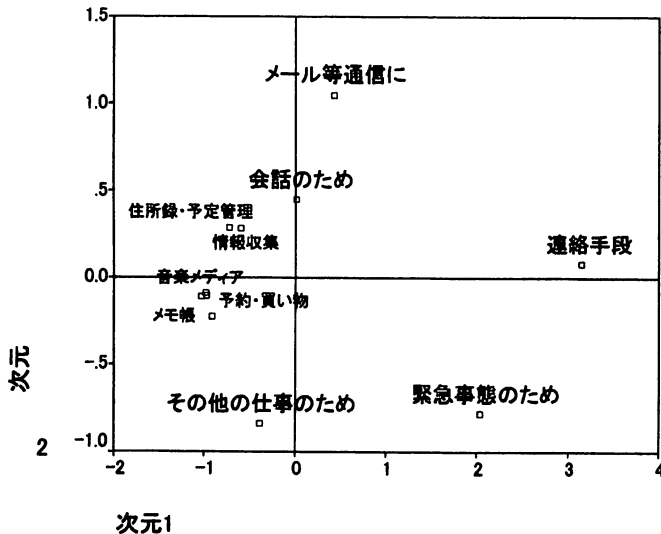
(2) コンピュータの利用と研修の経験

コンピュータの利用経験年数をみると、「1～2年」が32%、「3～5年」が33%、「6～10年」が17%となっており、「11年以上」という長い経験をもつものと逆に、「なし」は

それぞれ1割弱となっている。地域別では、「なし」という回答者は市区が3%にすぎないのに、町で11%、村で16%と小さな自治体ほど未経験者が増えているが、それでも2割に満たない結果となって、経験者の方が多い。インターネットの利用経験年数では「なし」が25%、「1～2年」が49%、「3～4年」19%、「5年以上」が6%となった。コンピュータの研修経験では、「なし」が48%、「あり」が55%で、研修経験がないにもかかわらず利用者が多いのは、個人使用や自己啓発によって学習している実態が伺える。

(3) メディアの活用形態

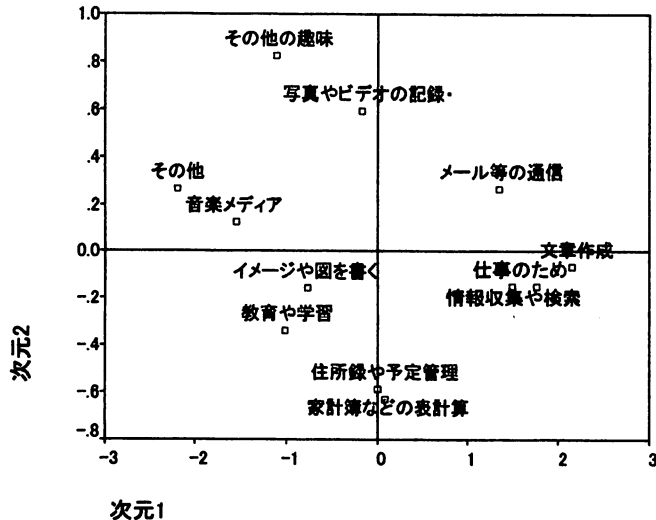
図 4-1 携帯電話の活用法



調査で取り上げたメディアは、その種類によって用いられ方が異なることがわかるが、担当者がそれぞれのメディアをどのように活用しているか、ここでは、パソコンと携帯電話の二種類について、その結果を図（ユークリッド距離モデルによる多次元尺度分析）に示した。

携帯電話は、通信、会話、そして非常の場合の連絡手段として、その機能は連絡を主としている。

図 4-2 パソコンの活用法

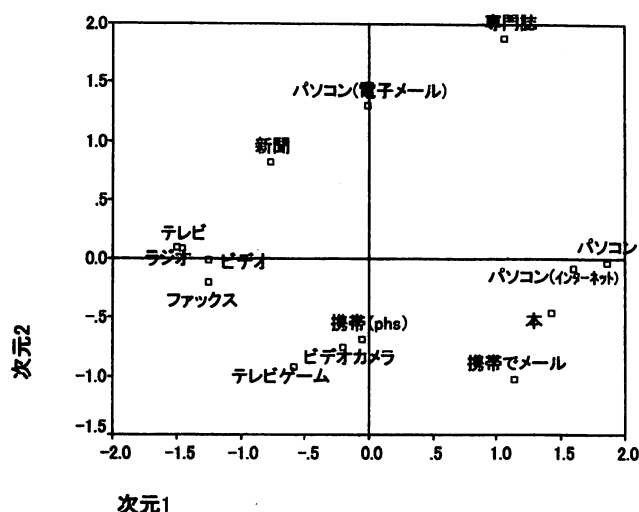


これに対し、パソコンの活用法のパターンは、趣味のため、日常生活の記録のため、仕事のためのおよそ三つのパターンに分かれている。

(4) メディア利用の難しさ

「あなたは、次のメディアを使う事（読む事、見る事など）がむずかしいと感じますか。」として、14のメディアを使う難しさについて尋ねた結果からその反応を多次元尺度に位置づけたのが、図 4-3 である。

図 4-3 メディアを使う難しさ



ラジオ、テレビ、ビデオ、ファックスなどのグループに対し、パソコンはまったく対局に位置し、専門誌や本などと同様、非常に利用が難しいという意識がある。これらのメディアで特に新しいメディアについて、学習者との結果を比較すると、電子メールについては、学習者ほど困難さを感じていないが、パソコンの利用に関しては、学習者同様、困難を感じる比率は高い。

ただし、同じメールでも、携帯とパソコンの場合では、困難さが異なって感じられている。

携帯のメールが難しいというグループと易しいというグループとの関係に対し、パソコンの利用は、まったく違う軸を形成している。

表 4-3 メディア利用の困難度

メディア	いつも感じる	ときどき感じる	感じない	合計
パソコン	18.7	49.9	31.4	100
(学習者)	20.7	47.1	32.2	
パソコン+インターネット	15.0	46.6	38.4	100
(学習者)	23.2	40.3	36.4	
パソコン電子メール	13.8	40.2	46.0	100
(学習者)	20.8	32.9	46.3	
携帯でメール	16.9	30.6	52.4	100
(学習者)	24.5	27.9	47.6	

学習者調査の結果と同様に、「パソコン（インターネット利用）の困難度」には、性差より、年齢差が大きく関係している。「携帯メールの利用の困難度」は、男性より、女性の方が低く、若い世代の方が利用を容易に行っている。ただし、50代については、男女関係なく困難と感じる人が多い。また、「パソコン（インターネット利用）の困難度」に対し、研修経験が大きな影響を持つかとみたが、分析結果では、研修経験の有無より年齢層の影響の方が大きい。以下、特に大きな困難度をもつパソコンについて、困難を克服するための要因として何が重要かを考察した。

(5) パソコンのリテラシーの形成要因について

自由記述の結果から、パソコンを所有しているかどうかで、そのリテラシーが異なってくるという記述がみられた。そこで、年齢層とパソコンの所有の有無がどのようにパソコン活用の困難さに関わってくるのであろうか。

表 4-4 「パソコン(インターネット利用)」の困難度と所有の有無

	パソコン(インターネット接続)リテラシー	
	p+ 易	p+ 難
	%	%
自分だけのものがある	72.8%	56.0%
職場で一緒に使うものがある	55.1%	58.0%
持っていない	7.7%	11.5%

インターネットを接続したパソコンの利用を易しいと感じるグループとそうでないグループの差異に注目すると、まず、パソコンを自分だけのものとしてもつ層とそうでな

い層では、困難度も異なっている。職場で一緒に使うものがあるかどうかよりは、自分だけのものとして使えるかどうかが大きな問題である。多くの企業において、従業員に1人一台のパソコンを所有させるようにする理由もここにあると思える。

表 4-5 「パソコン(インターネット利用)」の困難度と活用の方法

		パソコン(インターネット接続)リテラシー	
		p+I 易(N=271)	p+I 難(N=433)
		%	%
パソコン 活用法	文章作成のため	93.7%	91.2%
	イメージや図を書くため	45.0%	32.6%
	電子メール等の通信のため	87.5%	70.4%
	情報収集や検索のため	87.1%	75.1%
	住所録や予定の管理のため	57.2%	44.3%
	家計簿などの表計算のため	55.4%	48.0%
	音楽メディアとして	28.8%	15.9%
	写真やビデオの記録・加工	58.3%	42.5%
	その他の趣味のため	42.4%	29.6%
	教育や学習のため	37.6%	35.1%
	仕事のため	83.8%	82.9%
	その他	.7%	.9%
	使いたいと思わない	.0%	.7%

また、活用法とのクロス分析の結果では、「パソコン(インターネット利用)」を易しいと思うグループには、趣味や日常生活での多様な活用を考える回答率が高い。自分で所有している人のみにデータを統制した場合も同様の結果がみられる。逆に、難しいと感じる回答者には、「仕事のため」に活用するという回答率が高い。

表4-6 「パソコン(インターネット利用)」の困難度と活用の方法 (自分で所有、40代のみ)

		パソコン(インターネット)	
		p+I 易(N=221)	p+I 難(N=330)
		%	%
パソコン 活用法	文章作成のため	93.7%	93.0%
	イメージや図を書くため	44.3%	33.9%
	電子メール等の通信のため	91.0%	72.7%
	情報収集や検索のため	88.7%	77.3%
	住所録や予定の管理のため	57.5%	45.8%
	家計簿などの表計算のため	52.9%	46.7%
	音楽メディアとして	31.2%	18.5%
	写真やビデオの記録・加工	59.7%	47.6%
	その他の趣味のため	41.6%	31.5%
	教育や学習のため	38.5%	37.3%
	仕事のため	82.4%	85.2%
	その他	.9%	.9%

さらに、困難度への影響要因として年齢を統制し、40歳代にのみ回答者を絞っても、同様の結果が得られる。ただし、この結果では、「仕事のため」という回答率については、大きな差異がみられないが、年齢と自己所有を統制して、「仕事のため」、「その他の趣味のため」と、「パソコン(インターネット利用)」のクロス表を見ると、「仕事のため」の場合に困難度が高く、「趣味のため」の場合に低くなる傾向がある。以上のこ

とから、担当者のメディア利用においては、パソコン(インターネット接続)を単に仕事のためだけに利用するのではなく、より広い活用法を考えていくことが、リテラシーの向上につながるといえよう。

表4-7 「パソコン(インターネット利用)」の困難度と「趣味のために用いる」(自分で所有、40代のみ)

その他の趣味のためとパソコン+インターネットのクロス表

		パソコン+インターネット			合計
		いつも感じる	ときどき感じる	感じない	
その他の趣味のため	0 度数	55	173	130	358
	その他の趣味のため の %	15.4%	48.3%	36.3%	100.0%
	その他の趣味のため 度数	19	85	92	196
	その他の趣味のため の %	9.7%	43.4%	46.9%	100.0%
合計	度数	74	258	222	554
	その他の趣味のため の %	13.4%	46.6%	40.1%	100.0%

(立田慶裕)